

---

# 闇籠り

空無

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇籠り

### 【Zコード】

N7209D

### 【作者名】

空無

### 【あらすじ】

彼女は私の大切な友人。罪深く、憎んでもいい筈の私を受け入れてくれた彼女。……彼女は私の、太陽だつたんです。

起 \* \* \* \* \*

「アーシエス。アーシエス・レイ」

閉じた私の耳に、聞き慣れた女の声が届く。

声の主は……確か、ベルモント。ユグリッタ・ベルモント。湖水の夢を見ていた私は、金板を叩いたような声で起こされた。空に、下弦の月が浮かぶ頃。人が静寂を打つ時間。

「何の用だ」

「何の用だ、じゃないわよ。一ヶ月も封印しててつ」

そう言つて、私の身体を引き寄せる。

眠つてからそんなに経つっていたのか。

道理で身体がだるい。眠り続けたせいで、節々が痛んだ。

「もう、心配になつて見に来て正解だわ。  
その内干からびて消えちゃうわよ」

喧しい少女……いや、もう少女ではなくなつていた。

少し紅を引いたような唇は、蠱惑的な雰囲気をさえ漂わせている。けれど私の記憶の中の彼女は、少年さを秘めた子供だった。

「……それもいいな」

自嘲気味に、髪をかき上げながら呟く。

そう、それもいい。この退屈で苦痛な人生を終えられるなり、それでもいい。

「冗談じゃないわよ。」

パシンという乾いた音。

窓辺で、同胞が驚愕の声を上げていた。

「そんな簡単に、そんなこと言つもんじやないわ。」

貴方には生きていてもらわなきや。

生きるためにレイチャエルの命を喰らつたんだから

そうだった。

失言だつたな、とひとりごちる。

私は、死の渴きに絶えかねて彼女の妹の命を奪つたのだ。

彼女にとつて、私が生きていることが贖罪。

レイチャエル・ベルモントの姿を映した  
本来は姿無き化物であつても

「……君は強いな」  
「貴方が弱すぎるだけよ。」

人間はね、弱かつたらやつていけないの

妹の姿をした化物を、何故こうも優しげに見れるのか。

永く生きていたが、

人の命を喰らい続けていたが、

私はなんて人間のことを知らないのだらう。

彼女はまるで、私が直視できぬ太陽のよつだ

承 \* \* \* \* \*

闇夜が濃ければ、私にとつて都合が良い。

忌まわしい日の光も届かず、立ち騒ぐ人影も無い。  
僅かばかりの人の行き来が、私の行為に霧をかける。

「お嬢さん、どうしたんです、こんな夜更けに」

街灯に近い、アパートメントの入り口に腰掛ける。  
少女の姿は都合が良い。  
その様でいれば、紳士であろうとする男が、容易に釣れる。  
今宵も一人。

「靴を……」

衣服の裾を少しだけ持ち上げ、壊れた靴を見せる。  
さてこの男はどう出るか。  
馬車も、靴屋も、今は開いてはいない。  
男が、少女が夜更けに外にいる理由に相応しくないと思いつくか  
どうか。

「これはこれは。

お嬢さん、私の家まで来ませんか」

家に帰れば娘の靴を貸して差し上げられますから、と。  
今宵の獲物が決まった。

「お言葉に甘えてもかまいませんの？」  
勿論ですとも。わあ、参りましょ！」

ふわりと抱き上げられる。  
どうしても、壊れた靴で歩かせたくはないらしい。  
それはそれで都合が良い。  
襲うまでの動作が少なくて済む。

「あの……」「歩かせるわけには参りませんので。  
しばしば辛抱願いますよ、お嬢さん」

軽やかに歩いていく男。  
ああ、街灯の切れ目は何処だらうか。  
極上の魂の匂いがする。  
ああ、早く闇の隙間は無いだろうか。  
私を退屈させぬようにと話しかけてくる。  
優しい男だ。  
優しくて、暖かくて、だからこそ狙われる。  
不運な男。  
闇が来なければ最後の月夜にはならなかつただらうに。

「……貴方の命は私の中で、私を生かすために生き続けるんだ

壯年の男。  
命の味は甘かつた。

私は私が喰らつた命の集合体だと、教えてくれたのは貴女

転 \* \* \* \* \*

森の中は平穏だつた。

同胞達が人間を威嚇するから、普段森に人はいない。

「いい闇夜だね」

同胞達に歌を聞かせながら、背中を撫でさする。  
気持ちよさそうに、目を細めて。

ベルモントの娘に会つてから変わつた私を、非難することなく。

「人の命は私の中で、私が生きる限り続くのだそうだよ。

そう考えると気が休まるよ。

今までの私は、人の命を喰らつことに罪悪を抱いていたから

尤も、神の祝福の無い私に屠られて、命が天に行けるかは知らない。

そこまでは考えられない。

私は、私が行けぬだらう天を知らないから。

「相変わらずの異端振りだな。

それに、随分可愛らしくなつたな」

背後からの声に、背筋を凍らせる。

気付かなかつた自分が情けなく、気付かせなかつた相手が恐ろしかつた。

「ヒュー・ザスツ」

「アーシエス、気分はどうだね、わたしの子よ」

「誰がお前の子であるものか。」

例えお前によつて成された呪いであろうとつ

森の中は平穏だつた。

私の心とは裏腹に。

同胞は私より強いものの存在には逆らわない。  
風が草をなぶる音しか、耳に届かない。

「……誰？」

7

廃屋の向こうに、彼女がいた。

何故、と思う前に言葉が口をついて出た。

「来てはいけない、帰るんだつ」

「アーシエス？ その人は、誰？」

「呆れたな、人間とそこまで交わるとは」

「帰りなさいつ」

彼女の歩が進むことが恐ろしかつた。

化物は、すべてが彼女に優しいわけではないのに。  
少なくともこの男は、自分以外の誰も愛さないのに。

「ベルモントツ」

私が愚かだつたのか。

私が彼女の元に通えよかつたのか。

そうすれば、彼女から光を奪わずに済んだのに。

貴女は私の太陽なんです、例え光が失われても

結 \* \* \* \* \* \* \* \* \*

街は大騒ぎになつていた。

森の中への搜索も思案されたらしく、がさがさと草木が煩かつた。  
同胞達も、今日ばかりは人間達のために森をあけた。

「アーシェス……」

光を失つた彼女は、それでも太陽のように輝いていた。

彼女は太陽。では私は月なのだろうか。

そうかもしれない。

彼女が私を変えてしまつたから。

けれど、私のせいで彼女が変わつてしまつとは思つてもいなかつた。

「アーシェス、嘆かないで。私はいいから

私と同じモノになつてしまつたのに。  
もう一度と日の当たる場所に行けないのに。

「ベルモント……私は……」

レイチエルの身体を借りて いる私は 街を歩けるのに。  
もう彼女には それが できない。

「嘆かないで」

心の何処かで、こうなることを 望んでいたのだから。  
そう言つて、笑う。

やはり、私は、彼女に深入りしなければよかつた。

「さあ ベルモント。

アーシエスと遊びなさい。

どちらが私の子足りるかを見極めるために

ヒューザスの声が脳に響く。

彼は眷属は要らない。子を作るのも道楽。  
思い出す。私もまた、かつて、兄弟を屠つたことを。  
兄弟を屠る。残つた一人を彼は子と呼ぶ。

「さあ、遊びなさい」

私は何人の兄弟を屠つて きただろ。う。  
異端と呼ばれながらも、私はすべての兄弟を屠つた。  
昔も、今も、私は彼の長子なのだ。

「ねえ、アーシエス、可笑しいわ。  
身体が貴方を殺そうとするの」

私は、どうすれば良いのだろう。

私の命で彼女の生を繋げるか。

私が彼女を屠つて、姉妹諸共私の血肉にするのか。

ああ、でも彼女はもう決めている。

「アーシエス、私、もう十分よ」

貴女を屠つて、生き続けることこそ貴女達への贖罪

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7209d/>

---

閻籠り

2011年1月16日01時33分発行